

# イラン北部、鉄器時代後期における 精製土器斉一化現象の実態

有松 唯

Homogenization of the Fine Ware in the Second Half of the Iron Age,  
Northern Iran

Yui ARIMATSU

近年、鉄器時代後半段階（前 8 世紀半ば～前 6 世紀半ば）のイラン北部の山岳地帯について、オレンジ・ウェア（Orange Ware）と称される精製土器群の広域斉一化現象（Orange Ware Horizon）が指摘され始めた。本稿では未発表資料を実見した知見に基づき、この現象の範囲と詳細の解明を目的として、分析を行った。その結果、この現象は想定よりも東方におよび、且つ面的に広がっていた可能性が指摘できる。またミクロな範囲では、製作技術の微細な差異が認められた。オレンジ・ウェアの機能と重層的なスタイル分布、イラン北部域の地理的特性に着目し、民族学等の関連諸分野の知見を援用すると、この現象は多様な文化伝統をもつ諸集団と地理的多様性を内包した擬制的集団の痕跡、と解釈できる。そうだとすればこの時点で地域社会は安定的生態システムを伴い、再生産と領域拡大とを容易にしていた可能性が指摘できる。

キーワード：土器の機能、スタイル、集団編成、文化範疇、生態システム

Recently, the homogenization of fine ware (the Orange Ware Horizon) in the second half of the Iron Age (from the second half of the 8th century BC. to the middle of the 6th century BC.), in the mountains of northern Iran has been noted. In this paper, I utilize unpublished material and examine the range and detail of this phenomenon. The results indicate that it is possible that the Orange Ware diffusion may have spread to the eastern part of Iran. Furthermore, even within smaller distribution areas, Orange Ware exhibited minimum variation in production techniques. The function and multi-layered distribution of styles of Orange Ware combined with the geographical characteristic of northern Iran could suggest traces of a mimetic group and imply the presence of different culture-tradition groups within diverse geographic areas. If so, there is a possibility that the local community existed within a stable ecological system which helped facilitate reproduction and expansion of its territory during this period.

Key-word: function of pottery, style, organization of human group, cultural category, ecological system

## 1. イラン北部における鉄器時代後期の精製土器斉一化現象

現イラン・イスラム共和国（以下、イラン）に相当する地域の鉄器時代（前 1450 年～前 330 年）は、アケメネス朝ペルシャ成立に向かう領域国家形成期に相当する。近年、イラン北部の山岳地帯において、その後半段階（前 8 世紀半ば～前 6 世紀半ば）に相当する鉄器時代後期に関して、オレンジ・ウェア（Orange Ware）と称される精製土器群の広域斉一化現象（Orange Ware Horizon）が指摘され始めた（Arimatsu 2011; Piller 2008; Mahroozi and Piller 2009）。

オレンジ・ウェアは特徴的に明赤褐色を呈する精製土器

群で、現時点では約 500km 離れた地域間での類似が指摘されている。分布域は中東最高峰のダマヴァント山（標高 5678m）を有するエルボルズ山脈を中心に標高差が著しい。標高差に沿って、地勢も多様である。もしこの広域分布現象が当時の常態として確認できれば、オレンジ・ウェアは当地域の鉄器時代において最も広域に分布した土器群であると同時に、こうした地理的多様性をも包括した現象として、鉄器時代における物質文化変化の一画期として捉えられる。また時期的には上述したような領域国家形成の前段階に相当することから、歴史的画期との関連性を想定することも興味深い。

しかしこの現象の指摘自体近年の成果であり、未だ断片的な様相しか明らかになっていない。そこで本稿では未報告の資料を用いて「Orange Ware Horizon」の実態を検証し、この土器群の分布状況について新知見を提示する。具体的にはまず、採集資料や未検討の地域も対象として、この現象の範囲を検証する。次に対象地域を限定して、ミクロな分布傾向を明らかにする。同時に製作技術の多様性を検証する。さらに出土状況等を加味し、この土器群の機能を推定する。そして最後に、関連諸分野の知見を援用しながら土器の機能と属性ごとの分布傾向とを合わせて考察し、この現象が示唆する地域社会の変質に結び付けて、述べる。

## 2. 分析の対象と方法

### 2.1. 対象地域と対象資料

現時点でオレンジ・ウェアの出土が指摘されているのは、イラン北部のギーラーン (Gilan) とマーザンダーラーン (Mazandaran) の二地域である (図1)。本稿ではこの二地域から得られた資料と、マーザンダーラーンよりも東方に位置するゴルガン (Gorgan) 由来の資料も併せ、実見による所見をもとに分析を行う。

ギーラーンでは日本・イラン共同調査団 (日本側代表：

大津忠彦) による発掘調査と踏査 (Ohtsu et al. 2003, 2004a, 2004b, 2005, 2006)、さらにイラン当局の踏査 (Jahani 2006) によって得られた資料を対象とした。

発掘で得られた対象資料としてはまず、タッペ・ジャラリエ (Tappe Jalaliye) のⅡ層及びⅢ層から出土した土器片である。本稿では未発表の資料を含め計 4215 点を実見した。タッペ・ジャラリエはギーラーン州を縦断してカスピ海に至るセフィード・ルード (Sefid Rud) 川の西岸に位置する。山がちなこの地域のなかでは比較的平地且つ平坦な地点で、遺丘の頂上からはセフィード・ルード川の本流を見渡すことができる。また、この地域で発掘調査が実施された唯一の鉄器時代集落遺跡である点も重要だ。また具体的な性格は不明だが、堅固な石製の基礎の存在から、大型建造物が中心にあった可能性が高い。2002 年から 2004 年にかけての発掘調査で検出された出土遺物の大半は土器片で、粗製土器から精製土器まで多様である。そのほかに、少数ながら小型土偶や鉄片も検出されている。

加えて、キャルーラズ (Kaluraz) 出土土器である。この遺跡はタッペ・ジャラリエに近接している。1965 年から 1969 年にかけて、イラン当局による発掘調査が行われた (Hakemi 1968; 1973)。発掘者は当遺跡では前 2 千年紀後半から前 6 世紀にいたる多様な墓墳が確認されたと報

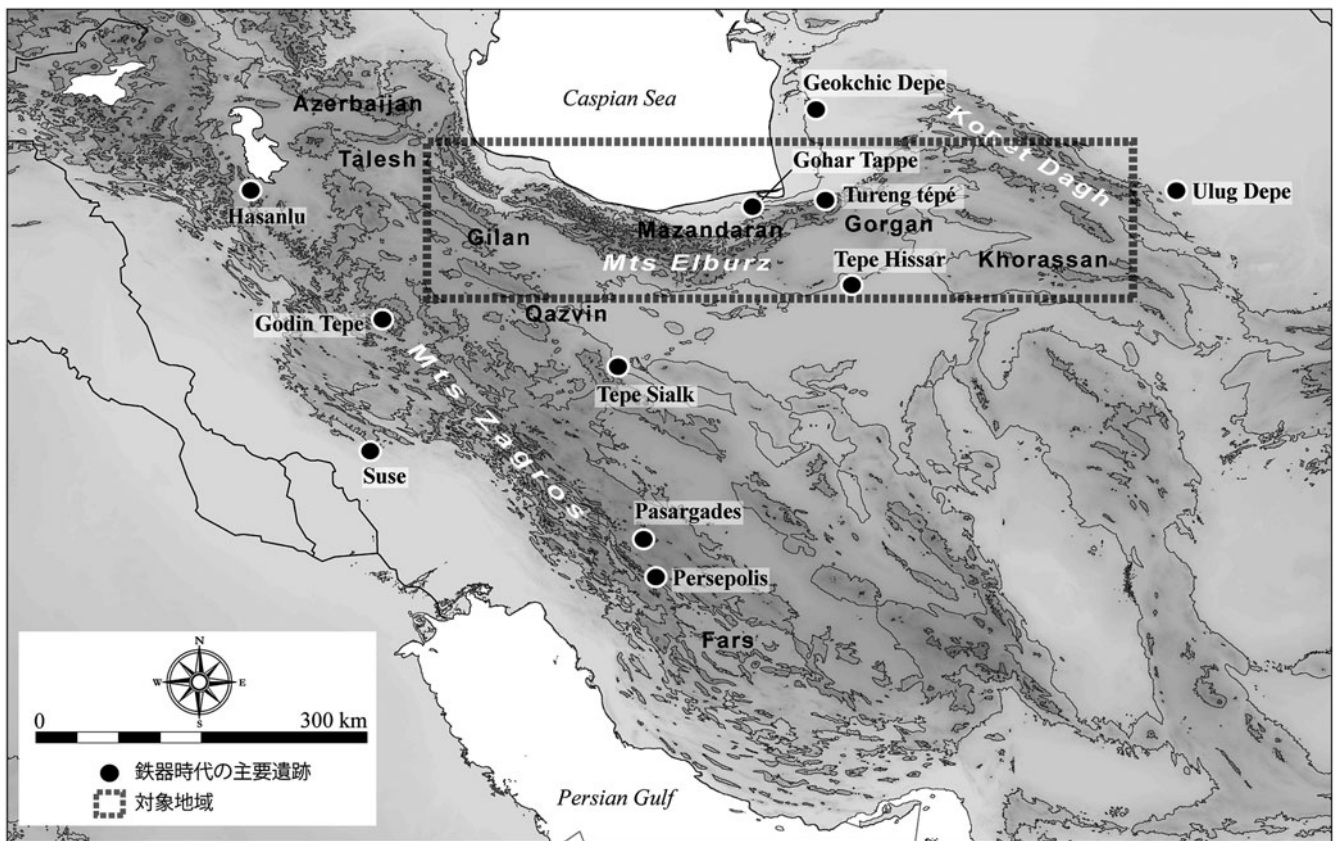


図1 イラン全国図と本稿の分析対象地域

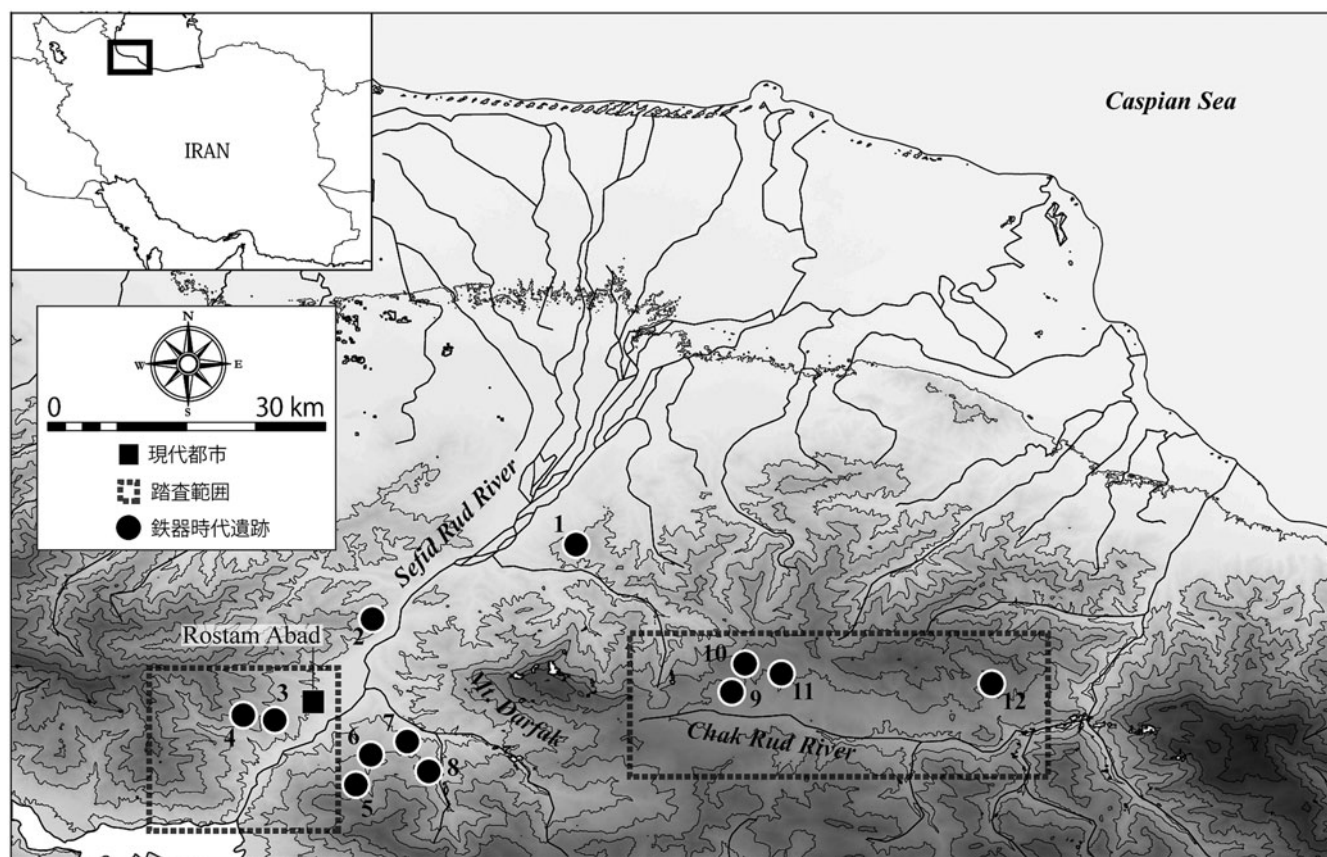


告している。大規模な石槨墓から土壙墓まであったようだ。さらに、建造物の痕跡と思われる石基礎や石壁が見つかったとの報告もある。出土遺物には動物を模した形象土器や土偶、金属器をはじめ、金銀製品、瑪瑙やラピスラズリなどの製品も出土している。発掘報告は断片的で、遺構の詳細な図面はない。出土遺物についても選別されたものしか掲載されていないようだし、コンテキストや同伴関係も不明だ。そのなかで一部の出土土器と土偶、金杯については、上述した日本・イラン共同調査によって2005年の夏に所蔵先のテヘラン国立博物館にて資料調査が行われ、報告がなされている (Ohtsu et al. 2006)。土器は完形土器ばかり51点である。同遺跡出土資料中の一部にすぎないが、ほとんどが未報告のものだった。本稿ではそこから得られた知見もあわせた。

ギーラーンで対象となるのは、この2遺跡近隣の3地点、セフィード・ルード川西岸、セフィード・ルード川東岸、チャーク・ルード (Chak Rud) 川流域 (図2) からの採集資料である。セフィード・ルード川西岸踏査遺跡と採集資料については概報が出版されている (Ohtsu et al. 2003, 2004a, 2004b, 2005, 2006)。本稿ではそこで明らかになっ

た161遺跡から採集された計5210点の土器片についても、一部未発表のものも含め、実見した所見に基づき独自に分析を行う。一方、ギーラーン州考古遺産観光庁が独自に行った踏査のうち、セフィード・ルード川西岸については踏査遺跡が上記共同調査のそれと重複するが、その際新たに採集された458点の未発表土器片を合わせて対象とする。チャーク・ルード川流域の踏査は、踏査遺跡のデータは公表済みだが (Jahani 2006) 採集資料は未報告だった。セフィード・ルード川東岸踏査は、踏査遺跡のデータ、採集資料ともに未公表だった。

マーザンダーラーンを含むイラン北東部については、広島大学イラン学術調査隊の成果に基づいた。まず、1971年にエルボルズ山脈を横断する規模で、カズヴィーン (Qazvin) からホラサーン (Khorasan) にかけての主要遺跡 (82遺跡) を対象に行われた遺跡踏査である (隊長: 松崎寿和)。そしてもう一つ、1974年と76年にゴルガーンで行われた遺跡分布調査 (224遺跡) と試掘調査 (3遺跡) (隊長: 潮見浩) である。この両調査の成果は、遺跡の位置と一部資料についての報告 (広島大学文学部 1973; 広島大学イラン学術調査隊; 1976; 1978) をのぞき、大部分は



1: Lameh Zamin, 2: Jamsid Abad, 3: Tappe Jalaliye, 4: Kaluraz, 5: Ali Karam Bagh, 6: Marlik, 7: Zeinab Bejar, 8: Gheshlagh, 9: Lasulkan, 10: Ghalekuti I, 11: Ghalekuti II, 12: Tomadjan

図2 ギーラーンの対象地域と鉄器時代の主要遺跡

未報告のままだった。そのうち約半数はテヘラーン国立博物館に、残りは広島大学考古学研究室に所蔵されている。今回は後者の資料を実見して得た知見をもとに述べる。

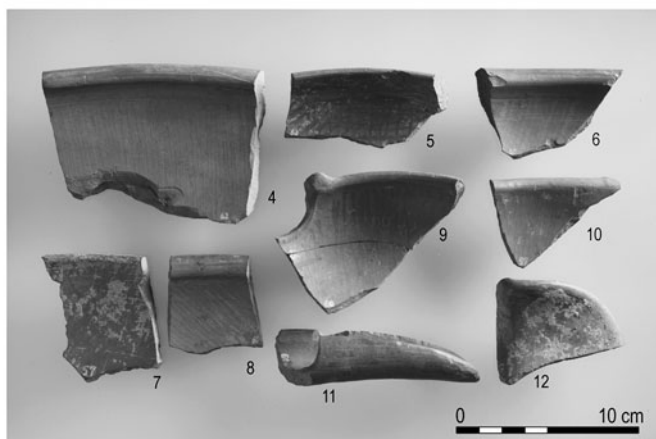
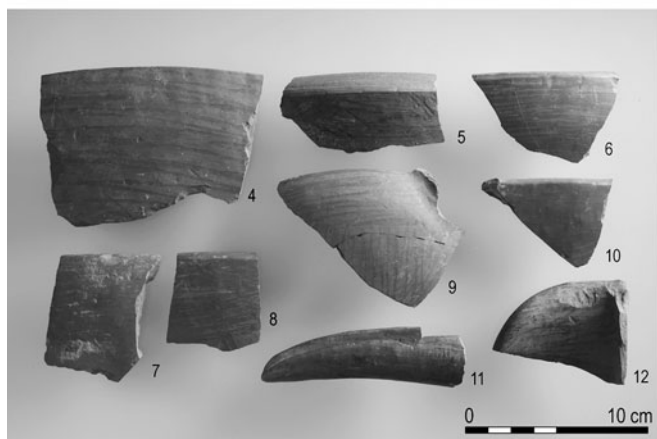
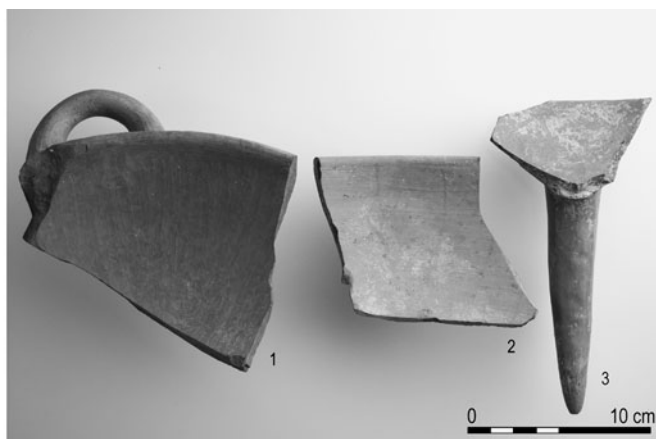
## 2.2. 分析の方法

本稿は3つの分析からなる。まず、採集資料を含めてギーラーンからホラサーンにかけての地域を対象とし、オレンジ・ウェアの分布域を確認する。すなわち「Orange Ware Horizon」という現象の輪郭を明確にする試みである。次に、資料が豊富に得られているギーラーンを対象に、ミクロなレベルでのオレンジ・ウェアのあり方を検証する。具体的にはオレンジ・ウェアのギーラーン内での分布傾向を抽出するとともに、製作技術や細部形態に沿ってオレンジ・ウェアを分類し、形態的斉一性のなかでのそれら諸属性のあり方を導く。すなわち、「Orange Ware Horizon」の内容を詳らかにする試みである。「同様の土器が分布する」という現象のなかでも、何れの属性がどの程度共有されているのかによって現象の意味合いは異なると考えられるためである（鈴木 2009; 林 1975; 1988; David et al. 1988; De Boer 1990; Dietler et Herbich 1989; Hardin 1977;

Gosselain 2002; Hardin 1996)。同時に、その土器の機能を精査することも現象の背景を解析するには不可欠である（Rice 1996: 151; Gosselain 2002: 9)。そこで三番目の分析として、上記二分析の結果に出土状況等を合わせて、オレンジ・ウェアの機能を推定する。最後に文化人類学や民族考古学等の知見を作業仮説としながらこれら現象を解釈し、「Orange Ware Horizon」の実態について述べる。

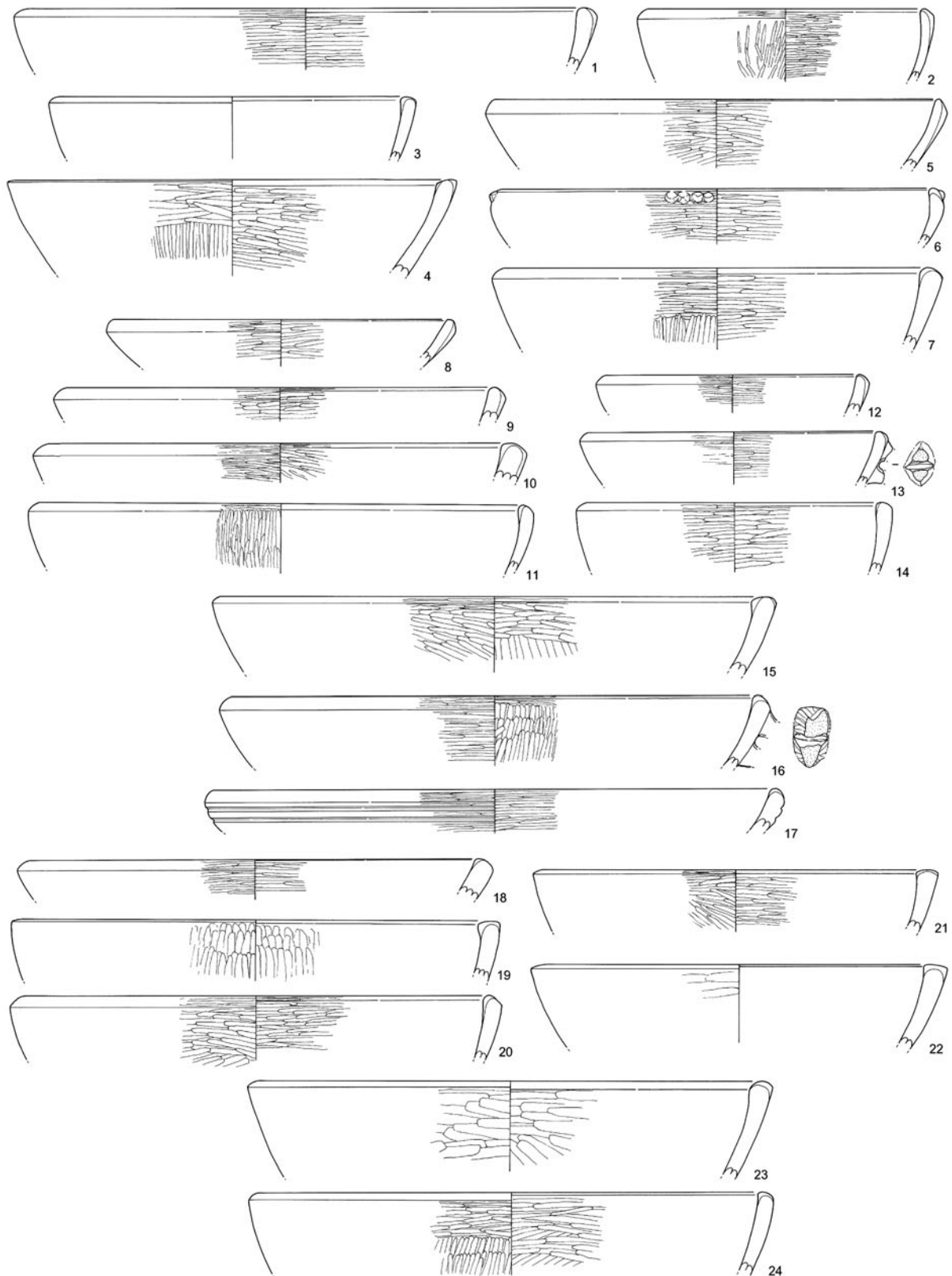
## 3. 分析1：イラン北部山岳地帯におけるオレンジ・ウェア分布域の検証

オレンジ・ウェアは特徴的に精製の胎土を用いて製作されていて、混和材は微細な砂粒を含む程度である。そして、概して明赤褐色を呈する。器面はしばしば回転台によるナデの後、ミガキカライト・バーニッシュで丁寧に平滑にされている（図3)。器種は、おそらくは鉢や皿など、いずれにせよ開いた器形が主だったようだ（図4～7)。完形での出土事例は乏しいが、それによれば片口付土器が多い。片口はそれのみで採集資料中にも確認できる（図3: 12)。付着の跡がのこる資料もあった（図3: 9, 10)。また脚が付く場合もある（図3: 3)。口唇部から胴部上半にかけて、



1~3. A6-6 4~5. Yagoh Tepe 6, 8, 9, 11. Utomadan 7, 10, 12. Gujumalla

図3 ゴルガーンおよびマーザンダーラーン採集オレンジ・ウェア（上段・下段はそれぞれ同資料。左：外面、右：内面）



1, 7. Juben Nahreposhte 2. Kushk Dasht A 3. Kushk Dasht B 4. Malegah 5. Juben Nargeshchal 6. Jukin  
8~14. Felekash A 15~24. Tappeh Jalaliye

0 10cm

図4 セフィード・ルード川西岸採集オレンジ・ウェア



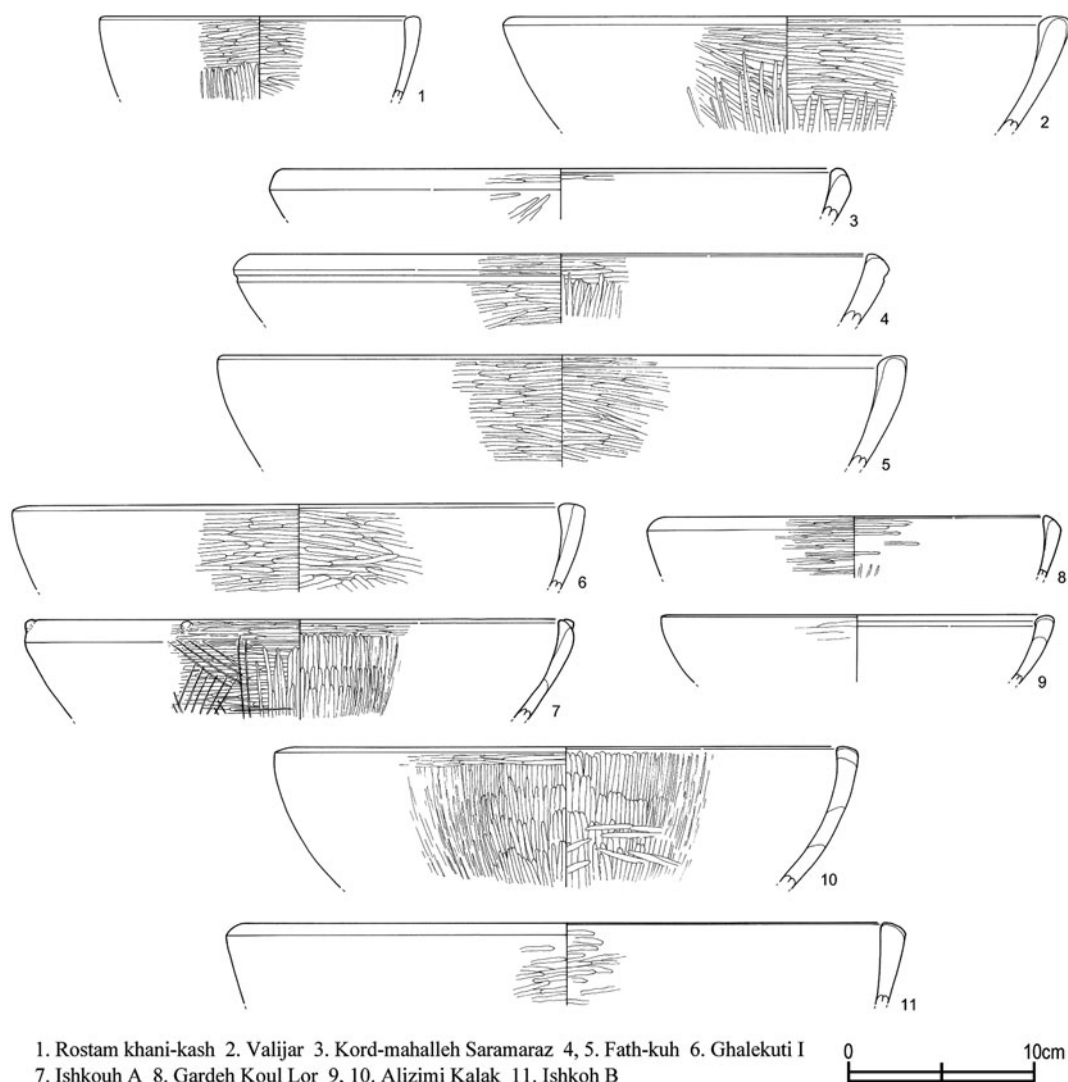


図5 セフィード・ルード川東岸およびチャーク・ルード川流域採集オレンジ・ウェア

縦方向の平行線あるいは格子状の暗文を施す例が散見される(図6: 8)。同様のモチーフを刻線で描く場合もある(図5: 7)。やや幅の広い複数の刻線を口縁部直下に水平に施す例もある(図4: 17, 5: 4)。少数だが、円形貼付文を口唇部直下に置くものもあった(図4: 6, 図5: 7)。仔細をみると、口縁部は肥厚させ、かつ口唇部は水平あるいは外傾してやや丸みを帯びる。そして口唇部と胴部の境には稜が形成される。

こうした属性に着目して上記対象資料を実見し、オレンジ・ウェアの採集遺跡を判断した。すると、オレンジ・ウェアは従来から存在が指摘されていたギーラーンやマーザンダーラーン以外でも、セムナーンやゴルガーンにも類例が指摘できる(図7)。イラン北部山岳地帯全域に分布している可能性が高い(図8)。想定よりも東方におよぶ分布域を確認することができた。

さらに、ギーラーンでは上記タッペ・ジャラリエより

西方のターレシュ(Talesh)(図1)でも、同様の土器が出土している可能性を指摘しておきたい(Khalatbari 2005a: 81-1, 3, 84-1; Khalatbari 2005b: 30, 33)。またゴルガーンの北東、トルクメニスタンのウルグ・デペ(Ulug Depe)でも、形態的にはゴルガーンのそれと類似する資料が指摘できる(Lecomte 2006; Boucharlat et al. 2005)。これら出土資料自体の実見はできていないため可能性の指摘に留めるが、報告書の写真や同地域の表採品を観察した限り、明赤褐色の器面、滑らかな器面調整、肥厚させた口縁部といった共通する特徴を備えている。

また網羅的踏査が実施されたギーラーンとゴルガーンの様子に基づけば、オレンジ・ウェアはある程度面的に分布していた可能性が高いと言える。少なくともこれら地域におけるこの土器の分布は偶発的ではなかったと考えられる。そうしたなか、ギーラーンとゴルガーンで比較した場合、地域間の相違を指摘することができる。前者では

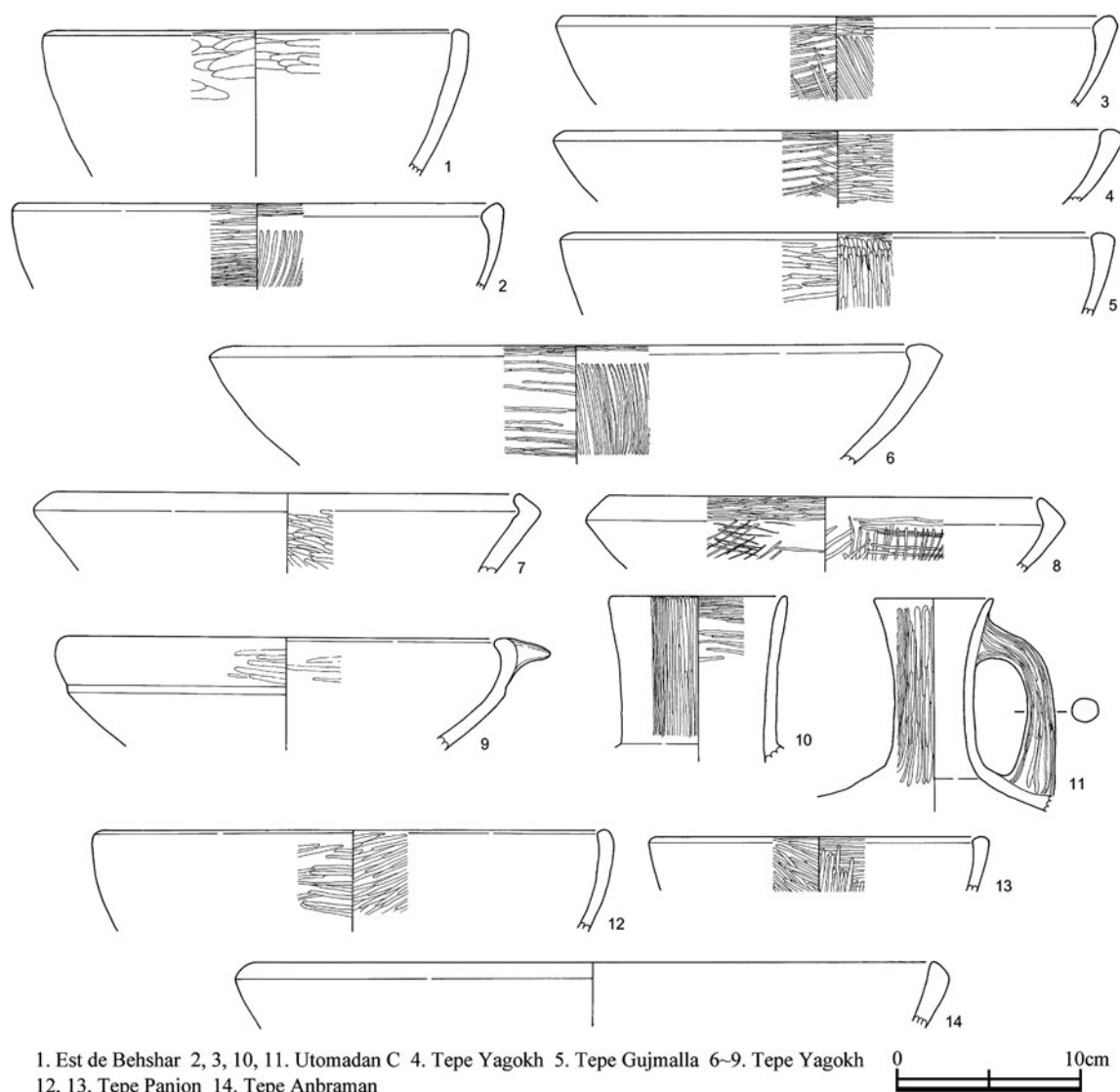


図6 セムナーンおよびマーザンダーラーン採集オレンジ・ウェア

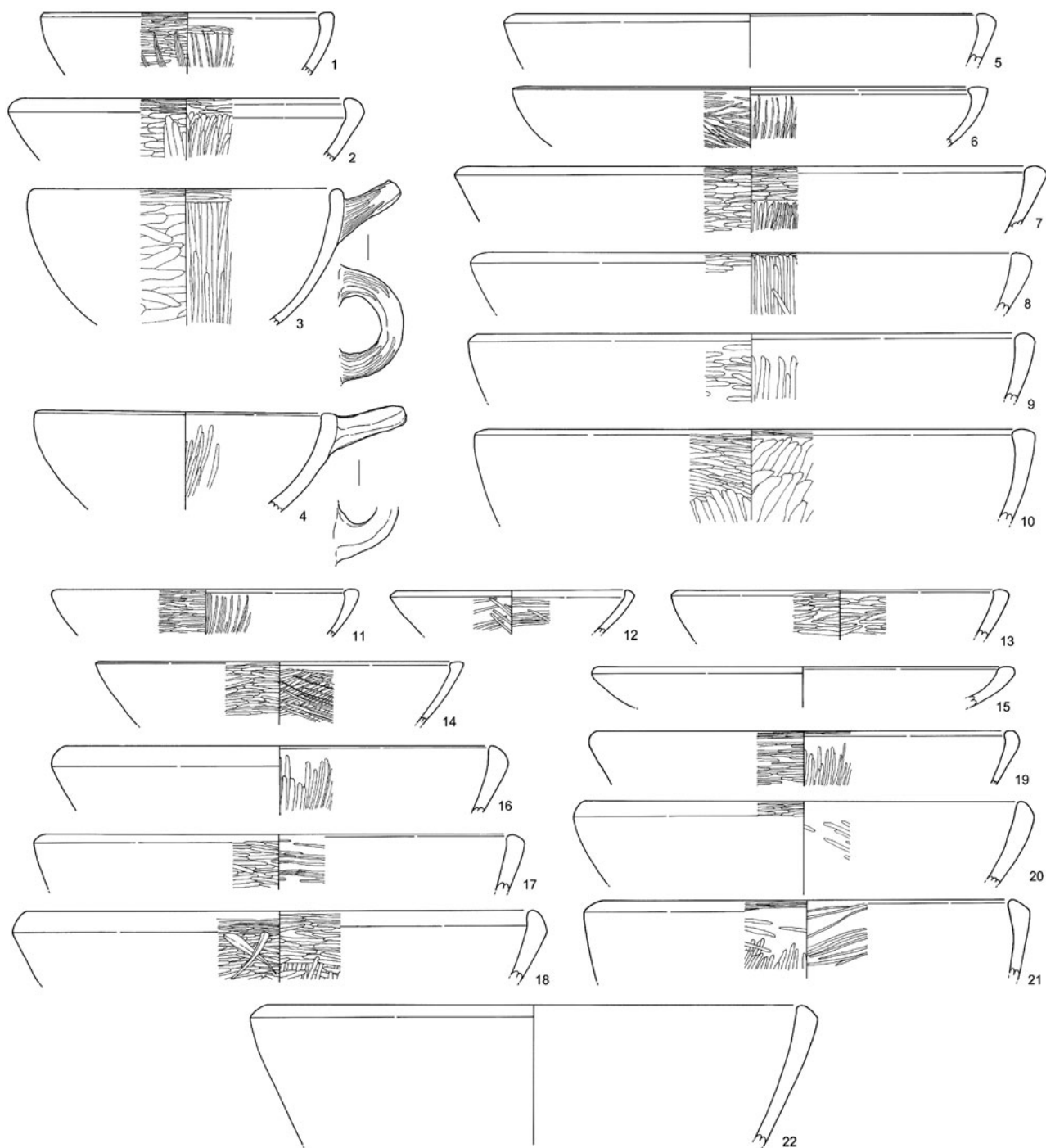
36%の遺跡で確認できたのに対し、後者では73%の遺跡で採集されていた。この分布偏向への着目はオレンジ・ウェアの伝播経路の解明に有意義かもしれない。

#### 4. 分析2：地域社会内でのオレンジ・ウェア

##### 4.1. ミクロな分布傾向

ギーラーンの対象域（図2）は、中央部にエルボルズ山脈からカスピ海に注ぐセフィード・ルード川が縦断する。エルボルズ山脈の一端を成す、山がちな地勢である。そのなかで、セフィード・ルード川西岸は、セフィード・ルード川にそそぐ複数の溪谷が起伏ある地形を形成している。セフィード・ルード川東岸には標高2703mのダマーヴァンド山（Mt. Damavand）を有する。チャーク・ルード川はダマーヴァンド山の東方、高原地帯に流域を成す。周囲は盆地状地形を成していて、山脈中ながら緩斜面の連なる

比較的ひらけた地形から成る。こうした地勢の中で、ギーラーンでのオレンジ・ウェアの分布は、セフィード・ルード川西岸にやや偏る。セフィード・ルード川西岸踏査遺跡153遺跡のうち、この土器群が確認できたのは18遺跡だった。対して、セフィード・ルード川東岸では139遺跡中6遺跡、チャーク・ルード川流域では93遺跡中6遺跡だった。さらに、セフィード・ルード川西岸域というよりミクロな範囲でも、分布は一様ではない。この地帯は上述したように高低差が伴う地勢から成るが、セフィード・ルード川に近接する地帯は比較的平坦で、ひらけている。そうしたなかでこの土器が検出された遺跡は、セフィード・ルード川の下流に位置する、平坦地の比較的多い溪谷沿いにやや偏って分布する（図9）。



1, 2, 6, 11. Din Tepe 3. A6-5 4. A4-2 5. B4-9 7. B5-3 8. B4-11 9. B3-13 10. A6-5 12. A3-2 13. B6-9 14. B6-1  
15. B6-14 16. A4-10 17. B3-1 18. B6-9 19. B5-3 20. B5-9 21. B6-10 22. B3-13



図7 ゴルガーン採集オレンジ・ウェア

## 4.2. オレンジ・ウェアの技術的多様性

### 4.2.1. 製作技術分類

オレンジ・ウェアは上述したように、製作技術にも一定の斉一性が認められる。内面にいたるまで器面を平滑にする、精緻な明褐色系の胎土を用いるといった点である。成形は基本的に輪積みだったようだ。そのなかで、装飾や口

唇部のヴァリエーション、製作技法に若干の差異が指摘できる。具体的には主に胎土、器面調整、口唇部成形、色調といった点である。それらに着目し、以下のように分類した。

(1) ジャラリエタイプ：1mm 以下の暗褐色の砂粒や 0.5mm 以下の白色の砂粒を含む程度で、胎土は概して精製。



そしてこのタイプの特徴は器面調整にある。内外面ともに概して極めて平滑にされる。器面はしばしば光沢をともなう。痕跡から視認した限りでは、まず、内外面に丁寧にナデがほどこされる。その後何らかの工具を用いて器面をさらに平滑にする。器面がある程度乾燥した後に施す通常の

ミガキとは異なり、この作業は器面がより湿り気を帯びた段階で実施されたようで、工具の痕跡が通常のミガキよりも鮮明に残る点が特徴だ。さらにこのタイプでは、口唇部が他のタイプよりも肥厚する場合が多い。口唇部の内外面に粘土を足し、肥厚させた痕跡がしばしば認められる。器

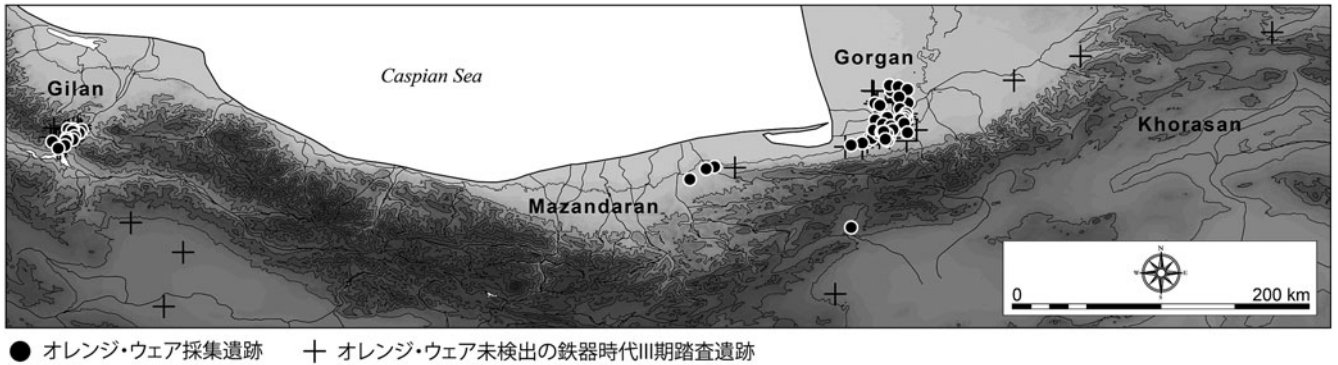


図8 エルボルズ山脈域におけるオレンジ・ウェアの分布

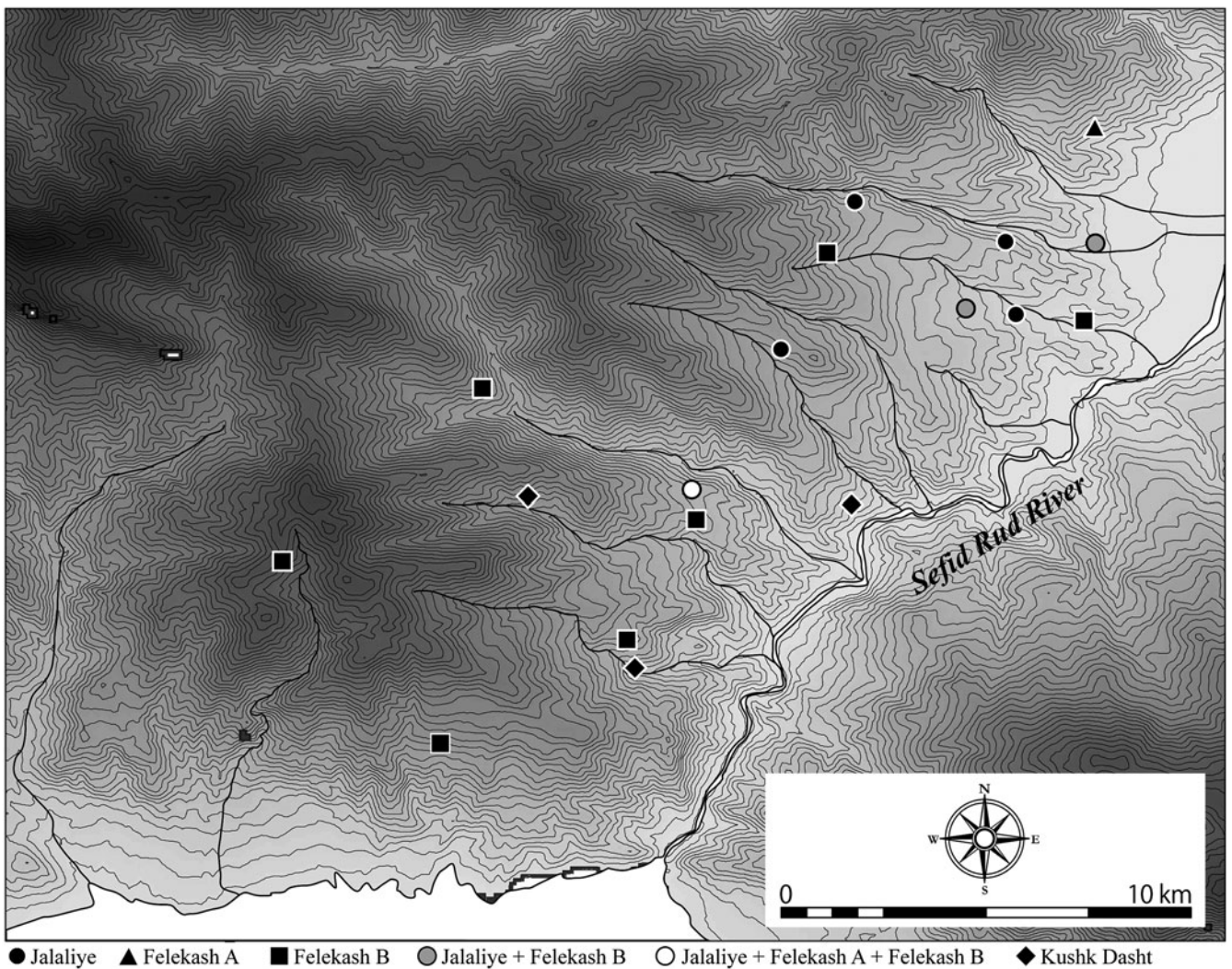


図9 セフィード・ルード川西岸におけるオレンジ・ウェア各製作技術タイプの分布

面の色調は明赤褐色を基調としながらもややヴァリエーションに富んでいて、暗色気味になる場合もあった。断面にはしばしば灰色の芯が確認できる。このタイプに該当するものには大型の物もある。さらに刻文や暗文による装飾的要素が散見されるのも、このタイプが多い。この製作技術では、特殊な装飾部位が付随される場合もあったのかもしれない(図10:15)。また同様の製作技法で作られた把手(図10:14)、嘴形の注口(図10:16)、短頸壺(図10:7-8)などもあった。

(2) フェレケシュ A タイプ: 特徴は、器面調整がほぼナデのみで行われることにある。器面はある程度は平滑だが、光沢は伴わない。胎土には微細な褐色系の砂をやや多めに含む。このタイプでは、口唇部はあまり肥厚させない。色調は鈍い赤褐色気味になる例が多い。

(3) フェレケシュ B タイプ: 胎土に 0.5mm 以下の微細な暗褐色、白色、雲母粒をやや多めに含む。こうした砂粒は器面から視認可能である。胎土は、他のタイプに比べるとやや粗な印象をうける。器面調整も特徴的で、細かい単位でのライト・バーニッシュを多用する。外面はこの調整によってある程度平滑にされる。口唇部には外面に薄く粘土を足す程度で、あまり肥厚しない。色調は明赤褐色や赤褐色が該当する。

(4) クシュク・ダシュトタイプ: このタイプの特徴は、明赤褐色あるいは橙色に近い明るい色調を呈する点にある。断面も同様の色調を呈する。胎土には 0.5mm 以下の微細な暗褐色あるいは黒色の砂粒を含む。またまれに、同様に微細な白色砂粒も含む場合もある。器面調整はほとんどがナデ。ただしフェレケシュ A タイプよりも丁寧で、単位は視認できない場合が多い。器面は滑らかではないが、平坦になる。断面には明瞭に灰色の芯が残っている場合が多い。

(5) デーラマンタイプ: 胎土には 1mm 以下の暗褐色の砂粒を含む。器面調整は主にライト・バーニッシュによる。色調は主に赤褐色だがやや暗く、鈍褐色や暗褐色に近い場合が多い。口唇部には厚く粘土を重ね、大きく肥厚させる場合もあった。また口縁部外面に貼付文や刻文などによる装飾を施す例もある(図5:7)。

これらのタイプを比較してみる。まず胎土の選択段階ではいずれも明褐色系の胎土が用いられている。混和材も、いずれも鉱物質の微細なものだった。ただしその種類と分量はタイプごとに異なっていた。特にフェレケシュ B タイプとクシュク・ダシュトタイプは個々に胎土も特徴的だ。微細な砂粒を多く含むという点で、フェレケシュ A タイプとフェレケシュ B タイプは類似していると言えるかもしれない。ただし、フェレケシュ B タイプは白色および雲母粒を多く含む点で、他のタイプとは区分される。胎土

に関して同様のものを用いているタイプはなさそうだ。口唇部の成形技法を比較してみる。フェレケシュ A、フェレケシュ B、クシュク・ダシュトタイプでは口唇部は外面に薄く粘土を重ねるにとどまる。口唇部内外面に粘土を重ねて厚くする例の多いジャラリエタイプと比べれば、これらは類似した傾向があるといえるかもしれない。器面調整では、ともにナデを多用する点ではフェレケシュ A タイプとクシュク・ダシュトタイプには類似性が指摘できる。

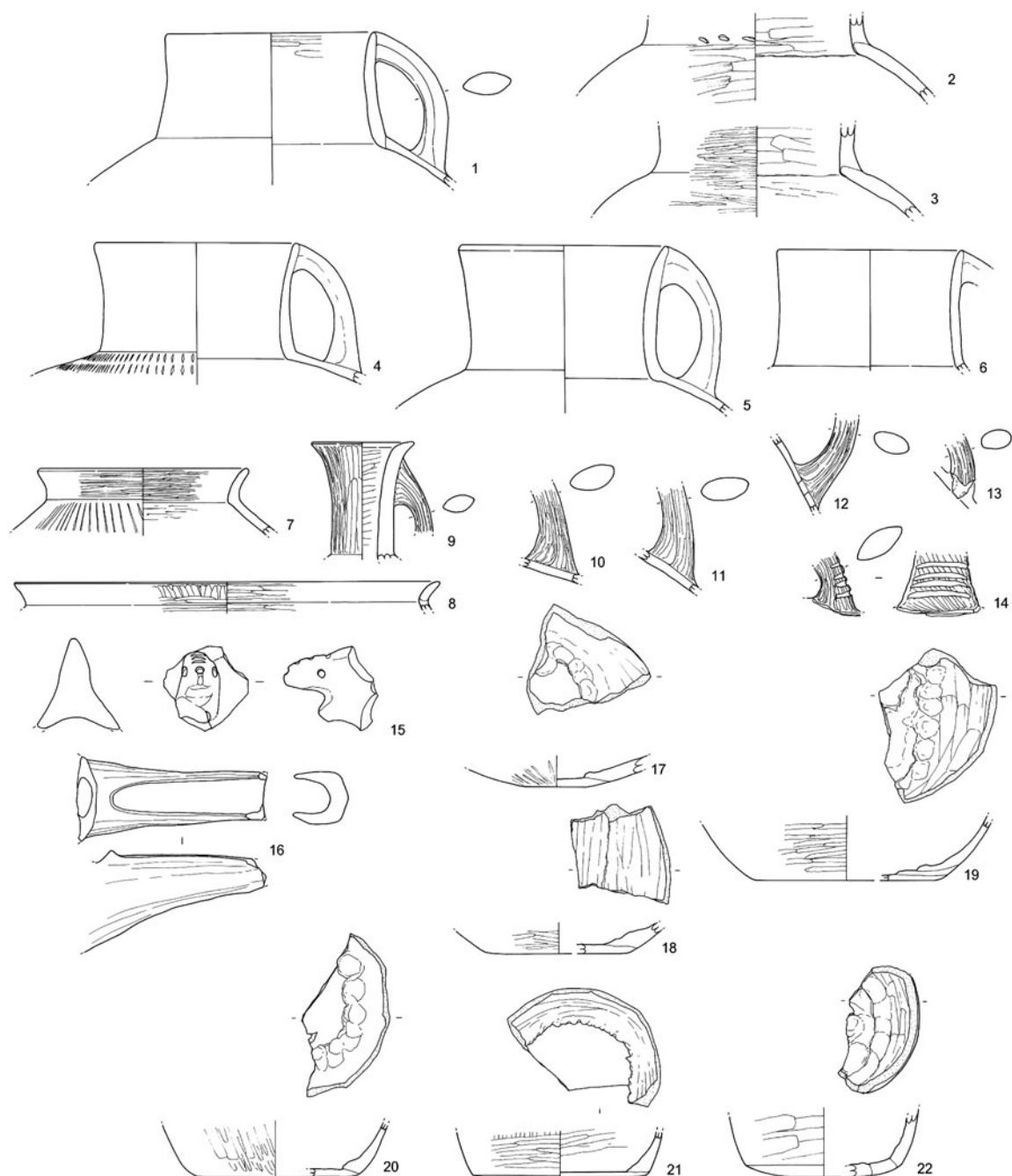
このように比較した場合、個々のタイプは胎土の調整段階からして異なる手法をもちいていたと言える。部分的な手法が類似する例も指摘できるが、作業の総体を共有していたような関係性は推測できない。使用する工具や作業手順も異なっていたのだろう。こうした個々のタイプの独自性はこうした口縁部作製以外の面からもうかがえる。例えばフェレケシュ B タイプとクシュク・ダシュトタイプでは同様の長頸壺(フェレケシュ B タイプ:図10:1-3;クシュク・ダシュトタイプ:図10:4-6)、おそらくはその底部と考えられる破片が採集された。こうしたことから、これらタイプは精製の鉢のみならず、土器組成自体を共有していた可能性もうかがえる。ただし、そのなかでも底部の成形方法について若干の相違が指摘できる。フェレケシュ B タイプの底部では底部と胴部の接合部分は多くが指押えなのに対し(図10:18-21)、クシュク・ダシュトタイプの底部では何らかの工具を用いて接合部分が調整されている(図10:22)。またフェレケシュ B タイプの把手には差し込み式のものが多いことも、このタイプの特徴としてあげられるかもしれない(図10:12-13)。こうしたことから、ここでの諸タイプは同様の器形を製作しながらも個々に異なった技術系統を有していたと考えられる。

#### 4.2.2. 製作技術分布パターン

まず、チャーク・ルード川流域で分布するのは、デーラマンタイプに限られる。セフィード・ルード川東岸では、ジャラリエタイプ、フェレケシュ A タイプ、フェレケシュ B タイプ、クシュク・ダシュトタイプが分布していた。採集された遺跡数でいえば、ジャラリエタイプ採集遺跡が約半数を占める。次にフェレケシュ A タイプ採集遺跡が多い。フェレケシュ B タイプとクシュク・ダシュトタイプは一例ずつに限られる。ただし、上記フェレケシュ B タイプあるいはクシュク・ダシュトタイプの壺類あるいはその底部は、この地域からも採集されている。

セフィード・ルード川西岸の様相は若干複雑である(図9)。ここではフェレケシュ B タイプとジャラリエタイプが多数を占める。このうち、フェレケシュ B タイプはセフィード・ルード川の上流、山岳地帯に近い付近に、対してジャラリエタイプは下流域、タッペ・ジャラリエ





1. Filideh 2, 3. Felekash B 4. Kushk Dasht A 5, 6. Kushk Dasht B 7. Taklamchal B 8. Emamzadeh Taher 9. Filideh E 10, 11. Felekash A 12, 13. Felekash B 14, 15. Tappe Jalaliye 16. Juben Marzankash 17~19. Felekash B 20. Kushk Dasht A 21. Karaki 22. Kushk Dasht

0 10cm

図10 セフィード・ルード川西岸採集鉄器時代後期土器

周辺を中心に、緩斜面域の遺跡やそこに至る支流域の遺跡に認められた。またこうした地域では、フェレケシュBタイプがあっても例外的で、多数がジャラリエタイプだったことを申し添えておきたい。

こうしてみると、この器形の製作あるいは流通にはある程度地勢に沿った相違が指摘できよう。デーラマタイプが分布するチャーク・ルード川流域、フェレケシュBが

主のセフィード・ルード川西岸上流支流域、ジャラリエタイプが主のセフィード・ルード川西岸下流支流域、そしてジャラリエタイプはセフィード・ルード川東岸にも分布する。

4.3. まとめ：地域社会内でのオレンジ・ウェアの分布状況  
ミクロなレベルでみた場合、オレンジ・ウェアはある程



度の限定性をもって分布していた。一様あるいは不規則に用いられていたわけではないようだ。さらに、複数の土器製作技術によって製作されていた可能性が高い。土器製作技術の分布はある程度地勢に沿っている。広域に分布するオレンジ・ウェアは、単一の生産地や流通拠点から配分されていたのではなく、複数個所の生産／流通拠点から限られた範囲内の遺跡にもたらされていたようだ。セフィード・ルード川西岸では支流域単位での分布だった可能性もある。

### 5. 分析3：オレンジ・ウェアの機能推定

人工物に実用的領域と非実用的領域という二つの領域を見出す見方 (Sackett 1982: 70) に沿うと、土器の実用的領域には物を納める容器としての実用的機能 (重要度：容器物としての土器<中身、作業)、非実用的領域には土器自体やそれが使われた場／行為に何らかの社会的価値を想定する象徴的機能 (重要度：物としての土器、土器を用いた行為≧中身) がそれぞれ対応する (Orton et al. 2001: 227-228)。

土製容器の実用的機能には主に、物の貯蔵、加工、移動がある (Orton et al. 2001: 217; Rice 1987: 208-209, Figure 7.1)。用途を推定するには主に、図像や文献の参照、理化学的分析も伴う使用痕の同定、出土状況および分布状況の検証、製作技法および器形からの推測がある (Orton et al. 2001: 218-226; Rice 1987: 210-211)。対象地域では土器の用途の推定につながるような図像や文献資料は乏しい。使用痕の同定例も無い。そのため、民族例を援用しながら器形と製作技術、出土状況を合わせて用途を推測することになる。

本章ではこうした見方に沿って、オレンジ・ウェアについての象徴的機能の有無の検証、そして実用的機能の具体化を試みる。

#### 5.1. オレンジ・ウェアの形態上の特徴

器種は皿類と鉢類に相当するような、開いた器形が主だった。完形での出土をみると片口付土器が多い。装飾は刻文や刻み目、暗文が主だった。刻文や暗文は口縁部直下や把手に施される。刻文では格子状、複数線による平行線になる場合が多い。暗文は格子状が主だった。刻み目は底部縁辺や把手の端部に施される。付属部は片口や把手が主である。把手は片把手で、水平になる場合もあったようだ。ただし小型で装飾要素も多いから、実用的意味は乏しかったのかもしれない。

#### 5.2. オレンジ・ウェアの製作技術上の特徴

前章で記述したように、オレンジ・ウェアにも複数の製

作技法が用いられていた。そのなかで共通するのは、大部分が明赤褐色で精製の胎土を用いる点だろう。この胎土はそれ以前から一部地域では土器製作の際に用いられていたが、これだけ多量に、広範に採用されるのは当該期になってからである。器面も同様の色調を呈する。これ以外にも暗色系を呈する場合もあったが、例外的だった。

成形は基本的には輪積みだったようだ。そして整形や器面調整の際には高速の回転台を用いたようだ。胴部が比較的残存している破片の場合、胴部外面下半に水平のナデ痕がみられる。これら土器の少なくとも胴部上半から口縁にかけては、こうしたナデの後に非常に丁寧にミガキあるいはライト・バーニッシュがほどこしてある。器面を平滑にする点も、これら土器の共通点として挙げられる。特に内面は下部にかけても丁寧に調整されている場合が多い。

#### 5.3. オレンジ・ウェアの出土状況

オレンジ・ウェアは、タッペ・ジャラリエ II 層および III 層から多量に出土し (Ohtsu et al. 2004: Fig. 148-81, 102; Ohtsu et al. 2005: Fig. 41: 17-8, 28-1, Fig. 42: 12-7)、出土口縁部片全体の 17.6% を占める (図 11: 1)。胴部片も含めた製作技術に基づく分類に沿えば、出土土器のなかでは精製で少数派の部類に位置付けられる (図 11: 2)。ギーラーンでの例をみる限りでは、墓地からは相対的に少数しか出土しないようだ。墓地の出土例をみると、キャルーラズで 1 点 (Ohtsu et al. 2006: Fig. 1: 7)、ガレクティ I 号丘から 1 点 (江上ほか編 1965: Pl. LXXIV-17)、ガレクティ II 号丘からも 1 点 (深井ほか編 1971: Pl. XLIII-12) が出土している。ちなみにガレクティ II 号丘の出土例は、墓からのものではないようだ。こうしたことから、この地域ではオレンジ・ウェアは集落遺跡で多用される傾向があったようだ。

マーザンダーラーンでは、ゴハール・タペ (Gohar Tappe) でオレンジ・ウェアの出土が指摘された。タッペ・ジャラリエ出土品との類似が指摘されていて、この遺跡の年代比定の根拠ともなっている (Mahroozi and Piller 2009: 197)。この遺跡は、イラン北部域では珍しい墓地と集落の複合遺跡である。また、銅石器時代から鉄器時代にかけてを網羅する長期にわたって使用されたようだ。そのなかでオレンジ・ウェアは墓及びピットからの出土が報告されている。双方での出土量の相違やピットの性格等は不明なため、当遺跡でのこの土器群の機能のこれ以上の精査は困難である

#### 5.4. まとめ：オレンジ・ウェアの機能

オレンジ・ウェアは一見単純な器形で、形態的特長に乏しいように思われる。しかし口縁部の形態には傾向があって、口唇部まで丁寧に整形されていた。これら細部の特徴

はすべて当該期に出現する。そうした部分は暗文、刻文で装飾される場合もめずらしくない。さらに多くは特徴的な明赤褐色の緻密な胎土が選択的に用いられている。調整も非常に丁寧である。全体に、丁寧に製作された容器となっている。そうした意味でも特徴的な土器といえよう。またいずれも二次焼成をうけた痕跡等はみあたらない。居住遺跡から出土する場合でも、出土土器全体の中では精製の部類にはいる。

こうした特質は、上記土製容器の主要用途に対応する形態的および技術的特徴、出土状況 (Henrickson and McDonald 1983; Orton et al. 2001: 218-226; Plog 1977; Pollock 1983: 360; Rice 1987: 236-242, Table 7.2; Shepard 1976) に照らすと、供膳用／供献用土器に適う。この用途の土器は広義には移動用でも、供膳用の土器は住居址やゴミ捨て場に加え、墓壙やキャッシュなど非日常的なコンテキストから出土する。形態は利便性よりも審美的価値を追求したものが多くなる。製作には比較的精緻な胎土を用い、器面はミガキやナデ、スリッなどで平滑にする。皿類や鉢類など、中身が視認できるような開口部の広い器形が主となる。

こうしたことからオレンジ・ウェアは、少なくともギーランでは居住遺跡内での供献用・共膳用容器として用いられる場面が多かったと考えられる。現時点では、この土器が用いられた場面についての具体化は困難だが、やや非日常的なあるいは公の場で用いられるようなこともあったように思われる。それは上述したようなこの土器の作りの精緻さもあるが、加えて、タッペ・ジャラリエから出土した土偶 (Ohtsu et al. 2005: Fig. 55: 33) との比較にもよる。同遺跡から出土するオレンジ・ウェアと土偶は同様の胎土と器面調整によって製作されていて、関連性が窺える。

そもそも供膳用の土器は象徴的機能を帯びやすいとされる (Orton et al. 2001: 227; Rice 1987: 240)。共膳は他者との交流の場や公の場でしばしば行われる行為だから、集団の慣習やタブーを反映し易い。だからそこで使用される容器も、属する集団特有の慣習的側面や価値体系を反映したものとなる。こうしたことから、オレンジ・ウェアはあ

る程度の象徴的機能も帯びた、広義の儀礼 (清水 1988) のような場面で用いられた容器だったのではないだろうか。すなわちこの容器の所有と使用、用いられる場面と行為に意味があって、オレンジ・ウェアの広域分布の背景には、その意味の共有があったとも考えられる。

## 6. Orange Ware Horizon の実態と意味

鉄器時代後期における精製土器の斉一化現象について、本稿では新たな資料と未報告資料を合わせて検討した。その結果、この土器群の形態的斉一化は現状での把握よりも東方に拡大することが明らかになった。また、ある程度の密度で分布していた可能性が高い。一方、ミクロな範囲で比較した場合、この土器が検出される遺跡の立地はランダムではなく、特定の地勢に偏っていたととらえられる。また一見同様でも、製作技術には地理的単位に沿った地域的多様性が存在する可能性が指摘される。

### 6.1. 土器分布圏の意味

土器諸属性の共有がどういった社会関係を反映しているのか。そもそも両者は相関しないとする指摘 (Arnold 1985; 1999; 2000; Brithwaite 1982; Conkey 1990; Goodby 1998; Hodder 1979; 1982; 1990; Lechtman 1984; 1993; Longacre 1981) もあるが、土器自体や土器のある属性に斉一性が認められた範囲が「ある種の共通基盤をもつ空間」 (岩崎 1988: 152) だということは確かだろう。しかし上述したように、如何なる機能の土器の如何なる属性を共有しているかによって、「共通基盤」は異なる。この点については関連諸分野の知見を援用し、作業仮説をまとめておくことが有意だと考える。

そのなかでオレンジ・ウェアについては、形態的属性と技術的属性分布傾向が異なることが判明した。「Orange Ware Horizon」の意味を考察するには看過できない点だと思われる。そこで本項では特に、土器の色、形、文様といった形態的要素、すなわち形態的スタイル (style morphologique) と、土器の製作技法、すなわち技術的スタイル (style technique) を対応させる見方 (Gosselain

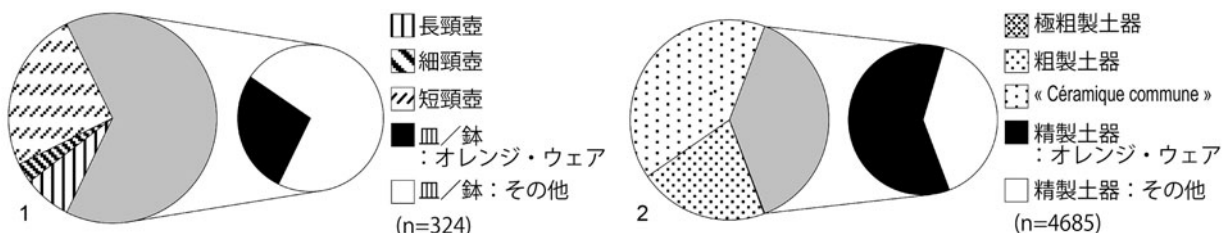


図 11 タッペ・ジャラリエ II 層および III 層出土土器片中のオレンジ・ウェアの割合  
(左：口縁部片中の割合、右：全土器片中の割合)



2002; Longacre et al. 2000) に着目してみたい。

形態的スタイルは視認できるし恣意的に変化させ易い。だから流行や実用的機能上の必要性に応じて同調し易い。だが、「実用的機能とあまり関係しない属性」(小林 2000)の共有は時に、政治的紐帯や社会階層といった表層の関係への帰属意識、特定の文化慣習の尊受といった心理的紐帯を内外に表象する機能をもつ (David et Henning 1972; De Boer 1990; Frank 1998; Gosselain 2002: 11; Hodder 1979; Longacre 1991)。

技術的スタイルは流動性や可塑性に乏しく、変化は緩慢になる (鈴木 2009: 430; De Boer 1990; Hardin et Mills 2000; Hodder 1979; Longacre 1981; 1991; Stanislawski 1977)。完成品から視認し難いから、偶発的な類似は形態的属性よりも起こり難い。恣意的な模倣の試みも、形態的属性よりは限られている。調整や特定の器形を成形するさいの特殊な技法、土器生産の効率向上につながる技法、実用的機能に不可欠な技法の獲得を志向した場合くらいだろうか。また模倣を試みた場合でも、時間をかけたノウハウ (savoir-faire) の習得／伝達が必要となる。それゆえ「変異性が弱く、現地性が強く、転移は容易でなく、伝達する際に欠落しやすい」(鈴木 2009: 430)。また「親密な接触 (深層の関係) でなければ伝わりにくい」し、「その転移には恒常的な接触が必要」(鈴木 2009: 432) となる。そうした属性が共有されている状態を想定してみる。ノウハウの習得／伝達は作業現場を共有する中での対面式のやり取りの過程でおこなわれるものであるから、日常的居住域、血縁関係、性別、言語の共有が重要になる (Gallay et Huysecom 1991; Gosselain 2002; Pétrequin et Pétrequin 1999)。よって技術的属性の共有は、こうした要素に基づく関係の近接性が想定できる (Gosselain 2002: 140)。加えて技術伝統の共有意識や特定の職人集団への帰属意識が技術伝達の前提になるという指摘もある (Gosselain 2002: 214-215; Stark (ed.) 1998; Sall 2001)。そうした紐帯は、土器製作者にとっては血縁関係と同程度に重要なものだったと考えられる (Frank 1998; Gosselain 2000; 2001; 2002: 215; MacEachern 1998; Sall 2001)。

こうしたことから、技術的スタイルが共通する範囲にはある程度恒常的かつ密接な社会的関係や根源的な紐帯、それを背景にした技術伝統を共有している技能集団の存在が想定できる (鈴木 2009; Dobres and Hoffman 1999; Gosselain 2002; Lechtman 1977; Lemonnier 1992; Stark (ed.) 1998)。技術的スタイルは製作者にとってより生得的に近い紐帯 (血縁関係、言語集団、教育環境) (Gosselain 2002: 11) や技能集団への帰属意識に対応すると考えられる (Blinkhorn 1997; Cameron 1998; Gosselain 2002; Pluciennik 1997; Stark et al. 1998; Wells 1995; 1998)。

## 6.2. Orange Ware Horizon の実態

こうした事例に照らして、「Orange Ware Horizon」の意味を考察してみたい。オレンジ・ウェアは象徴的機能を重視して作られたと考えられる土器である。こうした土器の使用は社会的に規定されていて、同様の品物の使用が表層的 (政治的、経済的) 紐帯、特定の文化慣習 (宗教などの信仰体系) への帰属を内外に表象する機能を有していたと想定できる (林部 1994; Bowser 2000)。また、オレンジ・ウェアの製作技術の多様性は、この土器が単一の生産／流通拠点からもたらされたのではないことを意味する。実用上有意な機能がさしてあったとは思えないこの土器を、人々は個々に志向し製作していた。この土器の形態的斉一化は、土器生産技術や単位、流通網の変化の結果ではなく、この物の所有やこの土製容器の使用場面／行動様式の共有が主要な背景としてあったと考えられる。

固有の価値体系や倫理規範によって固定化された慣習的行為を共有しているからこそ、ヒトは集団化され、集団は再生産され、実在化する (河合 2009: ix, xi-xiii, 表 1; 盛山 1995; 2000; ヘンドリー 2007: 177; 山本 1998; 渡辺 2007; Schütz 1932; Scott 1995; 1998)。ならば言葉をかえれば、そうした仕組みや価値体系、倫理規範を共有する範囲を集団ととらえることは、大過ないだろう。そのことをふまえて上記形態的スタイルの内容に立ち返れば、「実用的機能とあまり関係しない属性」あるいは「象徴的機能を重視して作られたと考えられる土器」の形態的スタイルの共有域のある種の集団の痕跡、さらに言えば、集団として実在化した文化範疇 (キーピング 1982; 曾我 2009) とみなしておくことは、あながち間違いではないだろう。

オレンジ・ウェアの形態的斉一化範囲、すなわち「Orange Ware Horizon」を、そうした有機的な人のまとまりとみなし、そうした集団形態が当地で確立した意味を考察してみたい。イラン北部は上述したように、標高差のある地勢から成る。標高に沿って気候や自然条件は異なり、直線距離上は大差無くとも多様な資源の獲得や生業が可能となる。そうした多様性を活用した事例として代表的なのは垂直方向の季節的移牧で、鉄器時代より主要な生業だった可能性も指摘されている (山内 2006)。上記オレンジ・ウェア共有域の解釈に沿えば、このような当地における「Orange Ware Horizon」の成立は、多様な資源、自然環境、生業形態を包括する集団の確立とみなせる。さらに、そこでの技術的スタイルの多様性を考慮すれば、その領域は性質の異なるより小規模な、おそらくは居住集団や技術集団の重層的関係から成っていたと解釈できる。

生態的多様性の内包は、地域社会の安定的な経済基盤の確保に結びついたと考えられる。また広範な関係性のなかで居住集団単位での既存の関係も維持されているという重



層的な集団編成のあり方も、集団維持の観点からすれば優れた点がある。具体的にはまず、生活レベルにおける環境との直接的な関わりは、小規模な居住集団単位で行われることになる。このあり方は自然環境への負荷を調整するのには適しているといえよう。一方、広い地理範囲に暮らす多様な人々とも紐帯をもつことにより、不慮の気候変動や抗争等に際して、より柔軟な相互扶助ネットワークを形成しているわけである。

「Orange Ware Horizon」の実態は、このような有機的関係性だと考える。イラン北部域においては、こうした社会的結びつきの広がりには領域の単なる面的拡大にとどまらず、人口動態と生態学的条件の圧力に応じて地域社会を再調整するシステムと、生存環境を脅かす突発的且つ大規模な危機に対応し得るシステムを兼ね備えた安定的な社会集団の形成（キージング 1982: 218; 杉山 2009; 寺嶋 2009）につながったと考える。こうした安定的な仕組みが機能すれば、集団領域のさらなる広域化が可能になる。それは人口増加に結びつき、人の増加と多様化は経済的にも社会的にも地域社会のさらなる安定的再生産へと結びつく。領域の拡大と構造の安定化という相乗効果へと発展することもおおいに考えられる。

イラン北部域において、こうした集団構造の変化の結果として解釈し得る現象は、遺跡分布の変化である（有松 2010）。テル状遺跡と堅固な石製基礎を持つ建物の出現、集落遺跡の急増は、こうした地域社会の経済的安定化の結果、領域内で従来よりも定住的な居住形態が実現したことを示しているとも考えられる。地域内でこうした居住形態と増加した人口を維持するには、構成員の生活を恒常的に保証するシステムがないと実現しないと考える。本稿で示したイラン北部の広域に亘る集団間関係の変化がその背景となった可能性を指摘して、本稿の結びとする。

#### 謝辞

広島大学所蔵資料の実見と公表は古瀬清秀先生に御許可をいただいた。また資料整理に際しては、野島永先生はじめ、広島大学大学院文学研究科修士課程の今福拓哉氏と同大学文学部三年生の諸氏にご助力いただいた。大津忠彦先生にはタッベ・ジャラリエ出土資料およびセフィード・ルード川西岸採集資料について実見と研究の許可をいただいた。セフィード・ルード川東岸採集資料とチャーク・ルード川流域採集資料の実見は、ギーラーン州考古遺産観光局と当局担当官の Vali Jahani 氏に許可していただいた。C. Piller 博士からはゴハール・タベについてのご教示をいただいた。R. Boucharlat 先生には多方面にわたるご指導をいただいた。記して深謝いたします。

#### 参考文献

Arimitsu, Y. 2011 *Communautés locales de l'âge du Fer dans l'Iran septentrional: variation régionale de la forme, de la chaîne opératoire et de la fonction de la céramique non-utilitaire*. Lyon: Thèse de l'Université Lumière Lyon 2.

- Arnold, D. E. 1985 *Ceramic Theory and Cultural Process*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Arnold, D. E. 1999 Advantages and Disadvantages of Vertical-half Molding Technology: Implications for Production Organization. In J. M. Skibo (ed.) *Pottery and People: A dynamic Interaction*, 59-80, Salt Lake City, University of Utah Press.
- Arnold, D. E. 2000 Does the Standardization of Ceramic Pastes Really Mean Specialization? *Journal of Archaeological Method and Theory* 7: 333-375.
- Blinkhorn, P. W. 1997 Habitus, Social Identity and Anglo-Saxon. In C. C. Cumberpatch and P. W. Blinkhorn (eds.) *Not So Much a Pot, More a Way of Life*, 113-124, Oxford, Oxbow Books.
- Boucharlat, R., H.-P. Francfort and O. Lecomte 2005 The Citadel of Ulug Tepe and the Iron Age Archaeological Sequence in Southern Central Asia. *Iranica Antiqua* 40: 479-513.
- Bowser, B. J. 2000 From Pottery to Politics: an Ethnoarchaeological Study of Political Factionalism, Ethnicity, and Domestic Pottery Style in the Ecuadorian Amazon. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7(3): 219-248.
- Brithwaite, M. 1982 Decoration as Ritual Symbol: A Theoretical Proposal and an Ethnologic Study in Southern Sudan. In I. Hodder (ed.) *Symbolic and Structural Archaeology*, 80-88. Cambridge, Cambridge University Press.
- Cameron, C. 1998 Coursed Adobe Architecture, Style, and Social Boundaries in the American Southwest. In M. Stark (ed.) *The Archaeology of Social Boundaries*, 183-207, Washington D. C., Smithsonian Institution Press.
- Conkey, M. W. 1990 Experimenting with Style in Archaeology: Some Historical and Theoretical Issues. In M. W. Conkey and C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, 5-17, Cambridge, Cambridge University Press.
- David, N. and H. Henning 1972 The Ethnography of Pottery: A Fulani Case Seen in Archaeological Perspective. *McCaleb Module in Anthropology* 21: 1-29.
- David, N., Sterner, J. and K. Gavua 1988 Why Pots are Decorated? *Current Anthropology* 29(3): 365-389.
- De Boer, W. R. 1990 Interaction, Imitation, and Communication as Expressed in Style: The Ucayali Experience. In M. W. Conkey and C. A. Hastorf (eds.), 82-104.
- Dietler, M. and I. Herbich. 1989 Tich Matek: The Technology of Luo Pottery Production and the Definition of Ceramic Style. *World archaeology* 21-1: 148-164.
- Dobres, M.-A. and C. R. Hoffman 1999 *The Social Dynamics of Technology: Practice, Politics and World Views*. Washington D. C., Smithsonian Institution Press.
- Frank, B. E. 1998 *Mande Potters and Leatherworkers. Art and Heritage in West Africa*. Washington D. C., Smithsonian Institution Press.
- Gallay, A. and É. Huysecom 1991 *Enquêtes ethnoarchéologiques au Mali. Rapport des deux premières missions 1988-1989, 1989-1990*. Genève, Document du département d'anthropologie de l'Université de Genève.
- Goodby, R. G. 1998 Technological patterning and social boundaries: Ceramic variability in southern New England, A. D. 1000-1675. In M. T. Stark (ed.) *The Archaeology of Social Boundaries*, 161-182, The Smithsonian Institution Press.
- Gosselain, O. P. 2000 Materializing Identities: An African Perspective. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7(3): 187-217.
- Gosselain, O. P. 2001 Globalizing Local Pottery Studies. In S. Beyries and P. Pétrequin (eds.) *Ethnoarchaeology and its Transfers. BAR International*

- Series 983, 95-111, Oxford, Archaeopress.
- Gosselain, O. P. 2002 *Poteries du Cameroun méridional: Styles techniques et rapports à l'identité*. Paris, CNRS Editions.
- Hakemi, A. 1968 Kaluraz and the civilization of the Mardes. *Archaeologia Viva* 1: 63-65.
- Hakemi, A. 1973 Excavation Kaluraz, Gilan. *Bulletin of the Asia Institute of Pahlavi Museum* 3: 1-7.
- Hardin, M. A. 1977 Individual Style in San José Pottery Painting: The Role of Deliberate Choice. In J. N. Hill and J. Gunn (eds.) *The Individual in Prehistory*, 109-136, New York, Academic Press.
- Hardin, K. L. 1996 Technological Style and the Making of Culture: Three Contexts of Production. In M. J. Arnoldi, C. M. Geary and K. L. Hardin (eds.) *African Material Culture*, 31-50, Bloomington, Indiana University Press.
- Hardin, M. A. and B. J. Mills 2000 The Social and Historical Context of Short-term Stylistic Replacement: A Zuni Case Study. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7(3): 139-163.
- Henrickson, E. F. and M. M. A. McDonald 1983 Ceramic form and Function: An Ethnographic Search and an Archaeological Application. *American Anthropologist* 85(3): 630-643.
- Hiroshima University Scientific Expedition to Iran 1976 *Archeological Map of the Gorgan Plain, Iran*. No. 1. Hiroshima, Denshi Insatsu.
- Hiroshima University Scientific Expedition to Iran 1978 *Archeological Map of the Gorgan Plain, Iran*. No. 2. Hiroshima, Denshi Insatsu.
- Hodder, I. 1979 Pottery Distribution: Service and Tribal Area. In M. Millet (ed.) *Pottery and Archaeologist*, 7-23, Londres, Institute of Archaeology, Occasional Publication 4.
- Hodder, I. 1982 *Symbols in Action: Ethnoarchaeological Studies of Material Culture*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hodder, I. 1990 Style as Historical Quality. In M. W. Conkey and C. A. Hastorf (eds.), *The Uses of Style in Archaeology*, 44-51, Cambridge, Cambridge University Press.
- Jahani, V. 2006 New Archeological Studies in Eastern Sefidrud (Deilaman cultural zone), In T. Ohtsu et al., 30-43.
- Khalatbari, M. R. 2003 *Archaeological Investigation in the Region of Ancient Talesh (Marian-Tandvyn)*. Tehran, ICHTO.
- Khalatbari, M. R. 2004a *Archaeological Investigations in Talesh, Gilan-1: Excavations at Toul-e Gilan*. Gilan, General Office of Iranian Cultural Heritage Organization of Gilan.
- Khalatbari, M. R. 2004b *Archaeological Investigations in Talesh, Gilan-2: Excavations at Vaske & Mianroud*. Gilan, General Office of Iranian Cultural Heritage Organization of Gilan.
- Lechtman, H. 1977 Style in Technology - Some Early Thoughts. In H. Lechtman and R. Merrill (eds.) *Material Culture: Styles, Organisation, and Dynamics of Technology*, 3-20, New York, West.
- Lechtman, H. 1984 Andean Value Systems and the Development of Prehistoric Metallurgy. *Technology and Culture* 25(1): 1-36.
- Lechtman, H. 1993 Technologies of power: The Andean case. In J. Henderson and P. Netherly (eds.) *Configurations of Power in Complex Societies*, 244-280. New York: Cornell University Press.
- Lecomte, O., H.-P. Francfort, R. Boucharlat and M. Mamedov 2004 Recherches archéologiques récentes à Ulug Dépe (Turkménistan). *Paléorient* 28: 123-133.
- Lecomte, O. 2006 A Median: Urban Settlement in Southern Central Asia: the Case of Ulug Depe. *5th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Abstracts*: 39.
- Lemonnier, P. 1992 *Elements for an Anthropology of Technology*. Ann Arbor, Museum Anthropology, University of Michigan.
- Longacre, W. A. 1981 Kalinga Pottery: An Ethnoarchaeological Study. In I. Hodder, G. Isaac and N. Hammond (eds.), *Pattern of the past: Studies in Honour of David Clarke*, 49-66. Cambridge, Cambridge University Press.
- Longacre, W. A. (ed.) 1991 *Ceramic Ethnoarchaeology*. Tuscon, The University of Arizona Press.
- Longacre, W. A., J. Xia and T. Yang 2000 I Want to Buy a Black Pot. *Journal of Archaeological Method and Theory* 7: 273-293.
- MacEachern, S. 1998 Scale, Style, and Cultural Variation: Technological Traditions in the Northern Mandara Mountains. In M. Stark (ed.), 107-131.
- Mahrooz, A. and C. K. Piller 2009 First Preliminary Report on the Joint Iranian-German Excavations at Gohar Tappe, Māzandarān, Iran. *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 41: 177-209.
- Negahban, E. O. 1996 *Marlik: The Complete Excavation Report*. Philadelphia, University of Chicago Press.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2003 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan First Season, 2001*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2004a *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Second Season, 2002*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2004b *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan Third Season*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., K. Yamauchi and J. Nokandeh 2005 *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Ohtsu, T., J. Nokandeh, K. Yamauchi and T. Adachi 2006 *Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fifth Season*. Tokyo, Iranian Cultural Heritage and Tourism Organization and Middle Eastern Culture Center in Japan.
- Orton, C., P. Tyers and A. Vince 2001 (1993) *Pottery in Archaeology*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Pétrequin, P. and A. M. Pétrequin 1999 La poterie en Nouvelle-Guinée: savoir-faire et transmission des techniques. *Journal de la société des Océanistes* 108-1: 71-101.
- Piller, C. K. 2008 *Untersuchungen zur relativen Chronologie der Nekropole von Marlik*. München, Dissertation an der Fakultät für Kulturwissenschaften der Ludwig-Maximilians-Universität München.
- Plog, S. 1977 *A Multivariate Approach to the Explanation of Ceramic Design Variation*. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Michigan.
- Pluciennik, M. Z. 1997 Historical, Geographical and Anthropological Investigations: Early Ceramics in Southern Italy. In C. C. Cumberpatch and P. W. Blinkhorn (eds.), *Not So Much a Pot, More a Way of Life*, 37-56. Oxford, Oxbow Books.
- Pollock, S. 1983 Style and Information: An Analysis of Susiana Ceramics. *Journal of Anthropological Archaeology* 2: 354-390.
- Rice, P. M. 1987 *Pottery Analysis: A Source Book*. Chicago, The University

- of Chicago Press.
- Rice, P. M. 1996 Recent Ceramic Analysis: 1. Function, Style and Origins. *Journal of Anthropological Research* 4 (2): 133-163.
- Sackett, J. R. 1982 Approaches to Style in Lithic Archaeology. *Journal of Anthropological Archaeology* 1: 59-112.
- Sall, M. 2001 *Traditions céramiques, identités et peuplement en Sénégalie. Ethnographie comparée et essai de reconstitution historique*. Bruxelles, Thèse de doctorat, Université libre de Bruxelles.
- Schütz, A. 1932 *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*. Wien, Springer Verlag.
- Scott, W. R. 1995 *Institutions and Organizations*. Thousand Oaks, Sage Publications Inc..
- Scott, W. R. 1998 *Organizations: Rational, and Open Systems*. New Jersey, Prentice-Hall.
- Shepard, A. 1976 *Ceramics for the Archaeologist*. Carnegie, Institute of Washington Publication 609.
- Stanislawski, M. B. 1977 Ethnoarchaeology of Hopi and Hopi-Tewa pottery making: Styles of Learning. In D. I. J. Yellen and W. Macdonald (eds.), *Experimental Archaeology*, 378-408, New York: Columbia University Press.
- Stark, M. T. (ed.) 1998 *The Archaeology of Social Boundaries*. Washington. D. C., Smithsonian Institution Press.
- Stark, M. T., M. D. Elson and J. J. Clark 1998 Social Boundaries and Technical Choices in Tonto Basin Prehistory. In M. T. Stark (ed.), 208-231.
- Wells, P. S. 1995 Identities, Material Culture, and Change: <Cells> and <Germans> in Late Iron Age Europe. *Journal of European archaeology* 3: 169-185.
- Wells, P. S. 1998 Identity and Material Culture in the Later Prehistory of Central Europe. *Journal of Archaeological Research* 6: 239-298.
- 有松 唯 2010 「遺跡分布から見たイラン北部山岳地帯における鉄器時代居住形態の分析」『オリエン』53 巻 2 号 1-33 頁。
- 岩崎卓也 1988 「4 章 古墳と地域社会」大塚初重・戸沢充則・佐原真 (編) 『日本考古学を学ぶ (3) 新版』152-166 頁 有斐閣。
- 江上波夫・深井晋司・増田精一 (編) 1965 『デーラマン I ガレクティ、ラルスカンの発掘 1960』東京大学東洋文化研究所。
- 河合香吏 2009 「序章 集団：人類社会の進化史的基盤を求めて」河合香吏編『集団－人類社会の進化』i-xvii 頁 京都大学学術出版会。
- キージング、R. M. (小川正恭・笠原政治・河合利光 訳) 1982 『親族集団と社会構造』未来社。(Keesing, R. M. 1975 *Kin Groups and Social Structure*. New York: Holt: Rinehart and Winston.)
- 小林正史 2000 「第 5 章 カリंगा土器の変化過程」小川英文 (編) 『現代の考古学 5 交流の考古学』134-179 頁 朝倉書店。
- 清水昭俊 1988 「儀礼の外延」青木保・黒田悦子 (編) 『儀礼 - 文化と様式的行動』117-147 頁 東京大学出版会。
- 杉山祐子 2009 「「われらベンバ」の小さな村：居住集団の日常と王国をつなぐしかけ」河合香吏 (編) 『集団－人類社会の進化』223-244 頁 京都大学学術出版会。
- 鈴木 信 2009 「縄縄文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民族博物館研究報告』第 152 集 401-458 頁。
- 盛山和夫 1995 『制度論の構図』創文社。
- 盛山和夫 2010 (2000) 『社会科学の理論とモデル 3 権力』東京大学出版会。
- 曾我 亨 2009 「感知される「まとまり」：可視的な「集団」と不可視的「範疇」の間」河合香吏 (編) 『集団－人類社会の進化』204-222 頁 京都大学学術出版会。
- 寺嶋秀明 2009 「「今ここの集団」から「はるかな集団」まで：狩猟採集民のバンド」河合香吏 (編) 『集団－人類社会の進化』183-201 頁 京都大学学術出版会。
- 林 謙作 1975 「縄文期の集団領域 (補論)」『考古学研究』第 21 巻 3 号：33-40 頁。
- 林 謙作 1988 「2 縄文時代の集落と領域」大塚初重・戸沢充則・佐原真 (編) 『日本考古学を学ぶ (3) 新版』108-127 頁 有斐閣。
- 林部 均 1994 「律令国家と土器の移動－飛鳥・奈良時代の畿内産土器研究の現状と今後－」『ヤマト王権と交流の諸相 古代王権と交流 5』261-294 頁 名著出版。
- 広島大学イラン学術調査隊 1973 『草原の道 The way of The Steppe -Archaeological Researches in Iran, 1971』亜紀書房。
- 深井晋司・池田次郎 (編) 1971 『デーラマン IV ガレクティ 第 I 号丘、第 II 号丘の発掘 1964』東京大学東洋文化研究所。
- ヘンドリー、J. (桑山敬己 訳) 2007 (2002) 『社会人類学入門－異民族の世界』法政大学出版会。(Hendry, J. 1999 *An Introduction to Social Anthropology: Other People's Worlds*. London: Macmillan Press.)
- 山内和也 2006 「イラン・キャルーラズ溪谷の文化的景観の出現と変遷」独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター編『叢書「文化財保護制度の研究」文化的景観の成立、その変遷 [第 18 回国際文化財保存修復研究会報告書]』11-35 頁 独立行政法人東京文化財研究所。
- 山本耕一 1998 『権力 社会的威力・イデオロギー・人間生態系』情況出版。
- 渡辺 深 2007 『組織社会学』ミネルヴァ書房。

有松 唯

広島大学大学院文学研究科

日本学術振興会特別研究員 (PD)

Yui ARIMATSU

Hiroshima University

Research Fellow of the Japan Society  
for the Promotion of Science



